

話題74 沖縄病院の創立70周年を祝して

名誉院長 石川清司

お祝いを申し上げます。

琉球民政府公衆衛生部金武保養院、琉球政府立金武保養院、国立療養所金武保養院、国立療養所沖縄病院、独立行政法人国立病院機構沖縄病院、この病院の名称の変遷は、沖縄の戦後の苦難の歴史そのものを象徴するものです。

戦前・戦後の混乱期に蔓延した結核との闘いの歴史は、住民の生活水準の向上と特効薬リファンピシンの登場により、大きく流れが変わってきました。国立療養所沖縄病院の時代においては、沖縄の医師不足とあいまって外科医も結核患者を担当しないといけなかった時代がありました。

源河圭一郎名誉院長のご指導のもと、呼吸器外科も結核の外科から肺がんの外科へと、時代を先取りして転換を図り、多くの業績を積み重ねることができました。加えて、国の政策医療としての神経・筋・難病対策においても、沖縄県における中核施設としての役割を担うことができました。

時代の流れは急速な変化を伴い、少子高齢化社会を迎え、地域医療も大きな変革の時代を迎えました。キーワードとしての「地域包括ケア」が、どのように展開されていくのかは不透明な状況にあります。

沖縄病院の診療の理念である「患者さまの立場を尊重し、高度で良質の医療を提供します」とする基本姿勢は、いつの時代においても通用する理念だと確信しております。変化がみられるとすれば、超高齢化社会を迎え、「患者さまの立場の尊重」が、「患者さまとご家族の立場の尊重」へとさらなる広がり求められる時代かもしれません。

地に足をつけた臨床研究の積み重ねが、病院の将来を占うことになるものと思われまます。身近にテーマを見つけて、深く広く展開し、PDCAサイクルの持続的回転とその加速が求められます。

離島県沖縄は、これまで以上に各医療機関の役割分担が求められるものと予測されます。肺がんを含めた呼吸器疾患診療とリハビリテーション、神経・筋疾患診療とリハビリテーション、緩和医療へのリハビリ部門の介入も求められます。日本の南の玄関としての沖縄の位置づけから、放射線治療部門の強化も一考に値するものと考えます。

超高齢化社会を迎え、医療のさらなる新たな展開が求められますが、沖縄病院の「患者様の立場に立った医療」の展開は、いつの時代においても基本になる姿勢であり、理念であり、堅持すべきものと考えます。

さらなる飛躍を期待してお祝いの挨拶といたします。

2018年9月